



第 38 号  
発行・鴻文会

山口大学人文学部・大学院  
人文科学研究科・旧文理学  
部文学科 同窓会

(事務所)  
〒753-0831 山口市平井773-2  
沖田ビル202  
電話・FAX 083-928-4527  
郵便振替口座 01500-4-15902  
http://kouibun.la.coocan.jp/  
メール:kobun1981@ybb.ne.jp

### 鴻ノ峰から山口の街を眺める。

本同窓会の名前の由来でもある「鴻ノ峰」。山口市街にキャンパスがあった頃先輩方も登られたであろうこの山に登ってみた。時間は街の様相を変えているが、澄んだ空気と静かさを感じていただけるだろうか。

### 鴻文会 この1年



鴻文会 会長  
内田 光邦

この一年間に、私が実行したり、考えたりしたことはいくつかを述べさせていただきます。

#### 1 鴻文会の歴史をたどろう

問1 会報「鴻文」の題字が現在のものになったのはいつ? また、この題字の揮毫者は誰ですか?

問2 会報「鴻文」の巻頭の見出し(二段抜き)において、次のように記載されたのはいつですか?  
祝・人文学部創立二〇周年  
創立二〇周年記念樹  
創立二〇周年に寄せて  
創立から二〇年の歩みをたどる  
卒業生からのお祝い

問3 「創立二〇周年」の前には、前身となる学部等はなかったのですか?

答1 「鴻文」の題字が現在のものになったのは、第一六号(一九九六年、平成八年)から。また、この題字の揮毫者は、元山口大学学長、元山口大学文理学部長、田中晃先生です。

答2 会報「鴻文」第一八号(一九九八年、平成一〇年)です。

答3 前身は、山口大学文理学部文学科です。(下段参照) 今後は、人文学部創立五〇周年行事が盛大に挙行されることを期待します。

会報創刊号の巻頭で、初代鴻文会長の和田敏英先生が「鴻文会の発足を機会に」と題する文を寄せられておられる、ここからその経緯を引用させていただきます。

「……さて、過ぐる昭和二十八年三月、山口大学文理学部では、文学科二四名及び理学科一五名の第一回卒業生が世に出ましたが、その翌年には早くも文理学部同窓会が結成されました。この第一回総会において、文理学部長を同窓会長とする規約も決定され、文理学部同窓会は正式に発足いたしました。以後、都合六回にわたる同窓会名簿や会報を発行し、また寄付事業を行うなど、しばらくは順調な歩みを続けておりましたが、前身母胎たる旧制山口高等学校同窓会との合流問題も進捗せず、やがて昭和四一年の教養部創設やそれに続く大学紛争の影響を受けて、同窓会活動はほとんどまったく停滞いたしました。ただ昭和五一年三月、学部内に設けた名簿刊行委員会の手によって、「山口大学文理学部卒業生名簿」を発刊したにとどまらず。その後、昭和五三年六月、文理学部は改組され、文学科と理学科はそれぞれ人文学部と理学科とに分離独立し、ようやく多年の宿願を果すことができました。

そこで、すでにご案内の通り、去る(昭和五六年：引用者注)一〇月三十一日に開催された文理学部同窓会において、文理学部同窓会も学部改組の現状に即して発展的に解消され、引き続き、文学科と人文学部、理学科と理学科をそれぞれ別組織とする新しい同窓会が発足いたしました。すなわち、われわれ文学科では、文学科と人文学部とを一本化する新同窓会「鴻文会」がその結成総会において誕生したわけであります。

この鴻文会の愛称は、申すまでもなく、山口市の由緒ある鴻の峰にちなみ、大鳥のごとく将来雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会「鴻南会」の一字をも継承することになります。こうして明春(昭和五七年春：引用者注)以降、わが鴻文会は人文学部の新入生及び卒業生を年々迎え入れる予定です。山口大学開学以来すでに三十数星霜、ほどなく二千名に達しよう

とする同窓生が、先輩後輩相擁して、この鴻文会の発足を機会に、今後ますます親睦の度を深め、社会における連帯を強化し、併せて母校の発展のために一致協力したいと念願するものです。」

2 鴻文会の役員・委員同士の接触を深めよう  
せっかく、縁あって役員・委員に選ばれたにもかかわらず、会議の日程の都合上、やむを得ず欠席される場合があります。双方の日程が合致すれば、小生が直接に本人にお会いして、意見や感想をお聞きするように努めています。また、新しく会員資格を有することになった人(新しく入学する人)にも全員に入会してもらうよう案内文を送付しています。

さらに、会報の編集・印刷・発送を通して、役員と会員、会員相互の意思疎通を深めています。会報の発行は、鴻文会の最重要事項に位置付けています。

3 吉田キャンパスをもっと知ろう

山口大学文学部文学科時代に後河原を中心とした一帯で過ごした卒業生たちは、ほんの一部の人を除けば、吉田キャンパスには一度も足を踏み入れることもありません。小生は少しでもこのキャンパスになじむために、山口大学同窓会理事会、人文学部長へ鴻文会長就任のあいさつ、山口大学初代学長の松山基範先生に関する展示の観覧、JCLに学ぶ長州ファイブに関する講演・異文化講演会「腐った社会秩序の魅力」の拝聴等時間が許すかぎりに参加しました。さらには、山口大学公開講座(デジタルカメラ使いこなし、山口県の市町の財政)に出席し勉強させてもらいました。

4 卒業生との繋がりを大切にしよう

山口大学の卒業生として学部との繋がりを保つために、ホームカミングデーに参加するように努めています。恩師や思い出深い先生方も退職されているのを耳にしますが、大学内の物理的な変化を知ったり、文科省から各大学への厳しい財政的な締め付けを、マスコミを通し

ただでなく、直接目の当たりにすることができません。担当の先生方とお話もできますし、自分が学生時代に勉強した分野について、最近の動向を把握することもできます。人文学部では、人目を引くような目新しい実験等は期待できそうにありませんが、学術の動向を知り、知的な関心を引き込まれることは間違いありません。財政的には弱小でも、今すぐ役に立たなくても、知性の地平がひらかれます。

山口大学の他学部の同窓会との繋がりが大切にしていきます。本年度は四つの同窓会からご案内をいただき、三つの同窓会の会合に出席しました

このように縦の関係だけでなく、役員と会員、会員相互の輪を拡げる等あらゆる関係の意思疎通を図りたいと考えています。皆様方からのフィードバックを期待しています。

今後とも、本会の活動に対しご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様方のますますの発展を心からお祈り申し上げます。

(文理第一五回卒 英米文学)

大学関連ニュース

(鴻文会が関わったもの)

山口大学同窓会理事会等の報告

- ・ 第二五回山口大学同窓会理事会  
平成三〇年三月二八日(水) 一五時～  
事務局二号館二階特別小会議室  
理事：内田会長出席

- ・ 共同獣医学部同窓会の設立及び負担金について  
次期会長候補者の選考について  
平成二九年度事業報告(暫定)について  
平成三〇年度事業について

- 山口大学基金について  
山口大学の動向について  
その他

- ・ 山口大学卒業式  
平成三〇年三月二〇日(火)  
山口県スポーツ文化センター  
内田会長出席

- ・ 第一回旧制山口高等学校一〇〇周年記念事業委員会  
平成三〇年四月二日(木) 一一時～  
一三時二〇分

- ・ 人文・理学部管理棟四階第二小会議室  
委員：内田会長 渡邊副会長代理出席  
委員会委員について  
行事予定について  
その他 情報提供

企画展「旧制山口高校から山口大学へ」

- ・ 第二六回山口大学同窓会理事会  
平成三〇年七月三〇日(月) 一五時三〇分～一七時  
事務局二号館二階特別小会議室  
理事：内田会長、森重副会長出席

- ・ 平成二九年度事業報告及び決算報告について  
平成三〇年度山口大学同窓会事業計画及び予算について

- 山口大学の動向について  
山口大学基金募金状況及び支援事業について  
その他

- 平成三〇年度から鴻文会監事山田氏が山口大学同窓会の監事に就任 任期二年

- ・ 第六回山口大学ホームカミングデー  
平成三〇年一〇月二七日(土) 一〇時～一六時  
人文学部：二〇分野の研究室を開放し、自由交流

礎にふれて

～旧制山口高等学校設立一〇〇年～

二〇一八年、今年には明治維新一五〇年で、山口では維新策源地として様々な行事が行われ、ちよつとした歴史ブームになっています。

年があげると、山口大学人文学部及び理学部の前身である旧制山口高等学校が設立されて一〇〇年となりますので、その歴史をひもといてみます。

第一次世界大戦を終え、経済成長を背景に高等教育機関への入学希望者が増えると同時に、産業界の優秀な人材を望む気風に乗り、大正八年、一九一九年四月に、それまでの八校に加え、新潟、松本、山口、松山の四校を加えた二校が官立高等学校となりました。開校準備、入学試験が行われ、同年九月二日第一回生の入学宣誓式が行われました。開校して一年後には、山口市糸米、現在の山口県立山口高等学校の場所に校舎本館、寄宿舎、特別教室、講堂など順次完成しています。県立山口高等学校の敷地内にある記念館は、この時に建てられた講堂です。



現在の講堂(県立山口高等学校校内)

擦り切れた学生服、マント、学帽、高下駄、腰に提げた手拭といった姿が典型的な学生の風貌であったとのことですので、そうした姿で下駄をカランカランとならしながら街を歩いていたのでしょうか。

萩への修学旅行や長途競争(後河原の山口座、現在の一の坂交通交流広場を出発し、ゴールの防府天満宮までの約二〇キロの距離を競ったもの)、校内弁論大会やクラスマッチ、創立記念祭、松山高校野球部との親善試合など勉学以外にも活発であった学生たちは三年間、友と語り青春を謳歌し、多くは大学に進学し、戦前の日本を支える優秀な人材となるべく巣立っていかれています。

資料をみていきますと、昭和一年のベルリンオリンピック、三段跳びで世界記録を樹立し金メダルを獲得された田島直人さんは昭和四年に山口高等学校に入学、京都大学に進学されました。

「男はつらいよ」シリーズの山田洋次映画監督も在籍されていました。数年前、「母と暮らせば」では主演の二宮和也さんは旧制山口高等学校の学生という設定で、旧制山口高等学校の学帽を映画製作資料として山口大学図書館が保管していたものを提供し、また、監督自らが寮歌「鴻南の歌」の指導をされたそうです。大学の四年間の勉学と友人との語らいが時間とともに心の中で醸成され、懐かしく思い出されるように、山田監督にとっても高等学校での時間が忘れがたいものとなっていた故のことであつたと思います。

先日、旧制山口高等学校の校札を山口高等学校生であった時に見たことがあること、現在は山口大学図書館が保管していると内田会長に伺いましたので、さっそく図書館に問い合わせ、見せていただきました。



旧制山口高等学校校札

裏面には京都大学名誉教授 佐々木惣一先生揮毫である旨が朱書きされています。

第二次世界大戦後の学制改革により一九四九年度(昭和二十四年度)末に旧制山口高等学校は廃止され、山口大学文学部が発足しました。

当時はそのまま文学部の教官となつた高等学校教員の方もおられ、校風も受け継がれ、学帽、下駄、腰に提げた手拭といった姿で街を闊歩された先輩方もいらつしやることと思います。

三〇年という短い歴史に幕を閉じた旧制山口高等学校ですが、約四、六〇〇名の卒業生が巣立っています。現在、鴻文会会長も委員として参画し、松野浩嗣前理学部長を委員長とする旧制山口高等学校一〇〇周年記念事業委員会が発足し、来年の設立一〇〇周年に合わせ、記念式典を開催することについて検討、準備しています。

山口大学ホームカミングデーの開催とあわせて、吉田キャンパス内において、

二〇一九年一〇月二六日(土) 午後  
記念式典  
祝賀会

が企画されています。  
(人文第三回卒・西洋史学 渡邊早苗)

旧制山口高等学校・山口大学文学部  
関連資料を探しています。

旧制山口高等学校一〇〇周年  
記念事業委員会  
電話: 〇八三一九三三―五二四四  
E-mail: yhs100@yamaguchi-u.ac.jp

鴻文会役員

平成二九年八月〜平成三三年八月

名誉会長

高木 智見(人文学部長)

会長

内田 光邦(昭四二年卒・英米文学)

副会長

森重 祐二(昭五五年卒・社会学)  
渡邊 早苗(昭五九年卒・西洋史学)

顧問

和田 敏英(昭二八年卒・英米文学)  
大塚 博久(昭三一年卒・中国哲学)  
大野 光生(昭三一年卒・中国哲学)  
田中 晋(昭四一年卒・英米文学)  
岡光 一浩(昭四一年卒・ドイツ文学)  
添田建治郎(昭四四年卒・国文学)

委員

兼清 仁志(昭五二年卒・中国哲学)  
原口 公康(昭六三年卒・日本思想史学)  
山本 明史(昭六三年卒・国史学)  
山本 達夫(昭六〇年卒・西洋史学)  
齊藤 禎(昭六一年卒・東洋史学)  
林田 徳夫(昭五七年卒・社会学)  
和崎 睦子(平六年卒・社会心理学)  
大谷 泰子(平一三年卒・社会情報論)  
正分あゆみ(平一六年卒・博物文化論)  
青島 啓(平一〇年卒・博物文化論)  
鈴木千登世(昭五九年卒・国文学)  
橋本 達彦(平五年卒・国文学)

藤井 浩子(平二五年卒・中国語学)

池田 容子(平九年卒・英米語文化論)

江浪 香織(平二七年卒・平一三年院修了)

浅野 靖(昭五七年卒・フランス語学)

中村稚恵利(平一三年卒・言語情報論)

監事

山田 典子(昭六一年卒・社会学)  
片山 恵子(平元年卒・英米文学)

学内委員

根ヶ山 徹(昭六〇年卒・中国語学)  
村田 裕一(平三年卒・考古学)



5月19日開催の鴻文会役員会

着任教員のご挨拶

図書館司書養成課程の  
新任教員として



伊東 達也

平成三〇年四月一日付で人文学部に着任いたしました伊東達也と申します。昨年度まで福岡の公立図書館に勤務しておりまして、現在、図書館司書養成課程で司書資格科目を担当しております。

司書資格というのは、図書館法で定められた図書館(公共図書館)の専門職員となるための国家資格なのですが、正職員としての図書館司書の求人が極端に少なくなっている昨今、職業資格としての魅力が乏しくなっています。それでも、「図書館司書になりたい」という学生が多いことに驚きましたが、聞けば、司書資格を取るために山口大学文学部を志望した新入生も多いとか。担当教員としての責任の重さを痛感しております。

私自身、大学でたまたま講義をきいたことから、図書館に関わるようになりました。国語の教師をめざして私立高校の講師をしていたころ、その頃通っていた二つ目の大学で初めて図書館情報学の講義をきき、「こんな素晴らしい世界があったのか」と、大学図書館に転職しました。それから地元福岡の公立図書館の立ち上げに関わり、以来、その図書館の司書として勤務しながら、図書館についての研究を進めてきました。私が司書として働き始めたのは、ちょうどバブル期が終わった頃だったのですが、その頃から公共図書館にもICT機器が普及し始め、図書館をとりまく社会の情報環境も大きく変わりました。それまでとは違う新しい時代の図書館のありかたが求められる一方で、情報機関とし

ての図書館の有効性や存在意義が問われるようになり、あらためて「図書館とはなにか」を究明する必要が生じたところから、大学院に進学して、本格的に研究活動を始めました。

現在の専門は図書館情報学と日本教育史、そのクロスオーバーしたところを研究対象としています。近代日本人の学びにおいて図書館の果たした役割を明らかにすることを目的として、明治期以来の図書館と図書館を利用してきた人々の営みを、近代日本の教育や学びの歴史のなかに位置づける作業を続けてきました。これによって、日本の社会や文化にとって「図書館」とはどんな意味をもつ存在なのかを、あらためて示すことができ、そこから将来の私たちに必要な図書館の姿がみえてくると考えております。

図書館は、本を中心とした各種の資料やネット上の情報源などを収集して、住民とそれらを結びつけ、生活や仕事に役立ててもらおう施設ですが、住みよさランキングの上位自治体の図書館充実度が高いことからわかるように、いまや図書館は市民生活に欠かせない社会基盤(インフラ)のひとつとなっています。また、それだけでなく、図書館に集まる人々が、本、知識、情報を仲立ちとして交流することで、新しい「知」を地域にもたらす場所でもあります。

近年のたび重なる自然災害からの復興支援とも相まって、国の「地方創生」政策の流れのなかで、図書館もまちづくりの拠点として地域の活性化に貢献することが求められています。そして、日本全国の図書館には、その地域の課題を解決するための情報拠点となることが期待されています。先の東日本大震災の後にも、各地の図書館で、復興や地域再生事業の一端を担うプロジェクトが取り組まれました。しかし、今後、そのような役割を担えるだけの有能な人材が、図書館界に不足しているのが現状です。

私は、山口大学文学部の卒業生が、一人でも多く、これからの日本の図書館のために能力を発揮してくれることを期待しています。そして、そのためのお手伝をすることが、山口大学での私の任務と考えております。

どうぞよろしく願い申し上げます。

(図書館司書養成課程 講師)



整備された「亀山公園」山頂広場  
毛利敬親騎馬像

人文学部教育職員紹介  
(平成三〇年一〇月現在)

学部長(併)

教授 高木 智 見

人文学科

哲学コース

教授 高木 智 見

教授 脇 條 靖 弘

教授 Ann Dinnall

教授 柏 木 寧 子

教授 藤 川 哲

教授 栗 原 剛

教授 村 上 龍

教授 横 田 蔵 人

歴史学コース

教授 橋 本 義 則

教授 馬 中 晋 彪

教授 田 中 幸 史

教授 竹 中 隆 行

教授 真 木 正 二 郎

教授 滝 野 裕 一

教授 村 田 勇 太

教授 池 田 俊

教授 石 田 俊

講師 南 雲 泰 輔

社会学コース

教授 横 田 尚 俊

教授 高 橋 征 仁

教授 速 水 聖 子

教授 谷 部 真 吾

教授 小 林 宏 至

教授 山 口 睦 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

准教授 桑 畑 洋 一 郎

資料提供 人文学部

### 山口大学吉田キャンパス(吉田遺跡)にて 古墳時代の新たな集落跡を発見

横山 成己

本学大学情報機構の埋蔵文化財資料館に所属している横山成己と申します。貴部卒業生でもなく、貴学部にも所属しておりませんが、このたびご依頼があり寄稿いたします。

本学吉田キャンパスが所在する吉田遺跡は、山口盆地を北東―南西に流れる樫野川の左岸に位置する遺跡で、約七二万㎡におよぶ吉田キャンパスの範囲にほぼ一致しています。昭和の初期、まだこの近辺が一面の田畑であった頃、現在の吉田キャンパス内やその周辺地域でしばしば土器や石器などが発見されていたことから、古くより遺跡の存在が推測されてきました。これまでの発掘調査や絵図などの古記録から、吉田の地は室町時代以降農村化が進み、江戸時代から吉田キャンパスの設立まで、ほぼその姿を変えずに農村として維持されていたことから、遺跡は大きな破壊から免れてきました。

このような状況下で、この地で最初に発掘調査がおこなわれたのは、各地に散在していた本学各学部の吉田地区への統合移転がきっかけとなりました。昭和四一年から始まったキャンパスの造成工事や建物建設で、土の中から多量の土器や石器が発見されたためです。遺跡破壊の危機に直面し、本学は学長を団長とし、学内外の関係学問分野の研究者を調査員とした「山口大学吉田遺跡調査団」を結成し、昭和四二年から統合移転が完了する昭和四八年まで発掘調査をおこないました。その結果、吉田キャンパスのほぼ全域から遺構や遺物が発見され、吉田遺跡が縄文時代晩期から江戸時代まで集落を営み続ける県内でも有数の複合遺跡(複数の時代にまたがる遺跡)であることが判明しました。

統合移転完了後の昭和五二年には埋蔵文化財資料館が竣工し、昭和五四年以降、本学の埋蔵文化財保護業務は当館に移行し、現在まで継続的に実施されています。

また、確認された遺構群の中でも特に歴史的価値が高いと判断された第一学生食堂南西側の弥生時代中期から古墳時代前期の集落跡の一部、そして弥生時代から江戸時代まで継続的に集落が営まれた学生会館前庭部は「遺跡保存地区」として保存・活用されています。

さて、吉田キャンパスの真ん中には、「中央広場」と呼ばれる芝生広場があります。本学の吉田地区への統合移転以降、平成一八年までは長らく噴水プールのある公園として、平成一八年度以降は駐輪場、芝生公園と姿を変えながら学生や教職員の憩いの空間として親しまれてきました。

平成二九年一月に至り、当地に福利厚生施設(山口大学生生活協同組合建物)の新営が計画されたことを受け、平成三〇年一月一五日より予備発掘調査を実施しました。調査の結果、現地表よりおよそ1m下に、竪穴式住居跡の可能性のある大型方形遺構や柱穴、溝状遺構など、多数の遺構が存在していることが明らかとなり、出土遺物から、古墳時代の集落址である可能性が高いことが判明しました。

中央広場の北に隣接する総合図書館では、平成二四年度に実施した三号館増築工事に伴う発掘調査にて、弥生時代から鎌倉時代にかけての多量の土器が投棄された東―西方向の自然河川を確認しました。これらの遺物は、河川の右岸部、総合図書館の北に位置する丘陵(学生会館前庭部や第二学生食堂敷地)上に集落を営んだ人々が投棄したと推定されますが、自然河川の左岸部については、総合図書館一号館や農学部校舎、理学部校舎などが未調査のまま建設されたため、地下の様相が不明のまま今日に至りました。

予備発掘調査の結果は、当館にとって衝撃的な内容でした。この貴重な遺構群を保護するべく、ただちに関係部局や山口大学生協に施設設計や建設位置の変更を求めましたが、本学当局の強い意志により、計画通りに開発を実施することが決定され、二月二日より、本発掘調査に切り替え、開発全域(約一〇〇㎡)を対象に調査を実施することになりました。



新たに確認された吉田遺跡の古墳時代集落

その結果、総合図書館三号館の調査に続き、当調査区においても、調査区南西端部に南東から北西に流れる自然河川を検出しました。このことから、当調査区は南東から北西に延びる尾根上にあたるということが判明しました。当地については、本学移転前は水田であったことが写真記録等から明らかとなつていますが、調査の結果、移転直前の一枚の大きな水田が以前は棚田であったこと、水田を構築する際に旧地形が大きく改変され、遺構の上部は大きく削平されていることなどが分かりました。

そのような状況下で、幸運にも方形竪穴住居跡四棟をはじめ、多数のピット(柱穴)や土壙(どこう:大きい穴)、風倒木(ふうとうぼく:風などの影響で根から倒れた木)の痕跡等を確認することができました。竪穴住居跡に関しては、出土した土器を見る限りでは、時期に大差はなく、いずれも古墳時代中期(五世紀)前半から中ごろのものとして推定されます。また、四号竪穴住居跡からは、山口県内でも珍しい「初期須恵器」と呼ばれる時期の須恵器高坏(たかつき:脚付きの器)と甕(はそう:液体を注ぐ容器)が出土しています。

学生会館前庭部から第二学生食堂敷地にかけて検出された古墳時代中期ごろの集落は、方形竪穴住居に新しい要素である造り付け電を設

けていることから、时期的にはその直前の集落である可能性が高いと考えています。今回確認した遺構群は、開発工事により全破壊される予定でしたが、山口大学生協のご厚意で、初期須恵器が出土した第四号竪穴住居跡に限り、設計変更による現状保存が決定されました。施設拡充に伴う開発工事と埋蔵文化財保護の両立は、なかなか難しい問題です。しかしながら、教育と研究を司る組織として、常に見識が問われる問題と言えます。今後とも当館の埋蔵文化財保護業務に対し、ご指導ご協力いただけると幸いです。



今回発見された第4号竪穴住居跡

埋蔵文化財資料館、横山先生にお願いし、山口大学吉田キャンパスで実施された発掘調査についてご説明いただきました。ご協力ありがとうございました。二〇一九年一〇月に新しい福利厚生施設が完成する予定です。

## ◎平成 29 年度事業報告

1. 正副会長会議 (5/13)
2. 第 47 回 (5/13) 第 48 回 (7/8) 役員会
3. 第 24 回 (5/29) ・ 第 25 回 (3/28) 山口大学同窓会理事会
4. 総会実施委員会 (8/19)
5. 第 10 回総会 (8/26)
6. 第 5 回山口大学ホームカミングデー  
および人文学部教員・在学生・卒業生交流会 (10/28)
7. 会報「鴻文」編集会議 (11/15)
8. 会報「鴻文」第 37 号発行 (12/15) および配布
9. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式 (3/20)
10. その他

## ◎平成 30 年度事業計画

1. 正副会長会議 (5/15)
2. 第 49 回役員会 (5/19)
3. 第 26 回山口大学同窓会理事会 (7/30)
4. 第 6 回山口大学ホームカミングデー (10/27)
5. 会報「鴻文」編集会議 (11/16)
6. 会報「鴻文」第 38 号発行 (12 月予定)
7. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式 (3/20)
8. その他

## ◎平成 29 年度決算

収入総額	6,015,713 円
支出総額	2,918,607 円
残高 (次年度繰越金)	3,097,106 円

## ◎平成 30 年度予算

## 〈収入の部〉

科 目	29年度予算額	決 算 額
繰越金	3,219,599	3,219,599
会費収入	1,800,000	1,860,000
賛助金	300,000	158,100
特別寄付金	0	778,000
雑収入	401	14
合 計	5,320,000	6,015,713

## 〈収入の部〉

科 目	30年度予算額	摘 要
繰越金	3,097,106	
会費収入	1,800,000	10,000×180人
繰入金	650,000	特別会計より繰り入れ(定期満期)
賛助金	300,000	
雑収入	22,894	利子等
合 計	5,870,000	

## 〈支出の部〉

科 目	29年度予算額	決 算 額
会議費	100,000	38,354
役員等行動費	100,000	9,000
事務所運営費	900,000	934,685
事務費・通信費	300,000	151,526
会報費	720,000	716,847
ホームページ維持費	50,000	21,816
分担金	151,000	150,864
寄付金	100,000	100,000
奨学金	151,000	0
助成金	100,000	22,864
慶弔費	50,000	15,885
総会費	900,000	746,622
予備費	1,698,000	10,144
合 計	5,320,000	2,918,607

## 〈支出の部〉

科 目	30年度予算額	摘 要
会議費	50,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役員等行動費	50,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事務所運営費	940,000	家賃、人件費、事務所経費(電話・電気、その他)
事務費・通信費	200,000	封筒印刷6,000枚、事務印刷、郵送、消耗品、雑費
会報費	750,000	印刷7,200部、発送6,000通、発送アルバイト代
ホームページ維持費	30,000	プロバイダ・契約料、メルウイリスチェック料、その他
分担金	151,000	山口大学同窓会(手数料含む)
寄付金	100,000	統合にともない山口大学教育後援財団から山口大学基金へ変更 検討事項:「日中学術交流基金」
奨学金	0	留学生奨学金
助成金	100,000	「同窓会等」開催助成(手数料を含む)
慶弔費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、香典料、弔電、その他
総会費	0	
予備費	3,449,000	
合 計	5,870,000	

## 〈特別会計〉

科 目	29年度財産	28年度財産
中国電力債	1,465,537	1,465,537
定額預金	650,000	650,000
合 計	2,115,537	2,115,537

平成30年4月30日、監査の結果過誤なく的確に  
経理されていることを確認します。

監 事 山田 典子  
片山 恵子

## 〈特別会計〉

科 目	30年度財産	摘 要
中国電力債	1,465,537	東洋証券
定額預金	0	一般会計へ繰出(H30/4定期満期振替)
合 計	1,465,537	

# 平成三〇年度 山口大学人文学部 生涯学習事業

平成三〇年度に人文学部生涯学習推進室が催した事業について、報告いたします。現在、生涯学習推進室では、山口大学地域未来創生センターと共同して、二つの公開講座を実施しています。一つは、山口市で開催する「やまぐちサタデー・カレッジ(以降、「サタデー・カレッジ」と略称)」であり、すでに二〇年以上前から続いています。もう一つは、防府市教育委員会のお世話で開く公開講演会であり、今年で七年目となりました。

前者のサタデー・カレッジは、例年、春と秋の二回開講してきましたが、今年から一回のみとなりました。開講数を減らした理由は、講師にかかる負担が大きくなってしまったからです。「鴻文」三七号(前号)でも報告いたしました。従来はサタデー・カレッジ当日になりますと、地域未来創生センターの職員の方がいらつしやう、教室準備、案内、受付、出席確認、受講生アンケート、記録写真撮影、後片付け等を行っていただきました。しかし、昨年度(平成二九年度)から、同センターの人員削減に伴い、職員が派遣されなくなったため、すべての業務を原則的に講師が担わなければならなくなりました。また、これまで、受講者の多少にかかわらず事前準備や当日の講義補助のため、学生アルバイトを採用することができたのですが、平成二九年度から運用規則が変更となり、受講者が三〇名以上でないと採用できなくなりました。近年の傾向からしますと、受講者が三〇名を超えることは少ないため、こうした事態もまた、講師の負担を増すこととなりました。それでも昨年度は、従来通りサタデー・カレッジを春と秋の二回開講したのですが、やはり大変であるという理由から、本年度より一回のみの開講としました。

こうして実施されました平成三〇年度のサタデー・カレッジは、五月一日と二六日に山口大学吉田キャンパスにて、民俗学を専門とする私、谷部真吾が「祭り」と「日本文化」というタイトルで行いました。日本各地には、多種多様な祭りが伝承されています。それらを丹念に調べていくと、その土地の人々が「カミ」に対して抱いてきた思いを読み取ることが出来ます。このように祭りとは、基本的に「カミ」への信仰をもとにした宗教的行為であるといえます。しかし、そうした祭りも、人やカネ、モノの集まる都市において、より華やかで、見ていて楽しいものへと発展していきました。そのような祭りのことを、民俗学では「祭礼」と呼びます。五月一九日の講義では、そうした民俗学的に見た祭りの概要を、九〇分授業を二コマ使い、「祭りとは何か」、「祭り」と「祭礼の違いについて」という項目にそって、解説しました。二六日は、京都の祇園祭を事例として取り上げ、もともと疫病の流行を防ぐための宗教的儀礼として始められたこの祭りが、現在のような豪華絢爛たる祭りへと、いつごろ、どのように発展していったのかを、「祇園御霊会の誕生」、「祇園会の祭礼化」という項目に分けて、同じく九〇分授業二コマで講義しました。受講者数は一〇人弱でしたが、宇部市や山陽小野田市から参加された方もいらつしやいました。



やまぐちサタデー・カレッジ2018の様子

「祭りとは何か」、「祭り」と「祭礼の違いについて」という項目にそって、解説しました。二六日は、京都の祇園祭を事例として取り上げ、もともと疫病の流行を防ぐための宗教的儀礼として始められたこの祭りが、現在のような豪華絢爛たる祭りへと、いつごろ、どのように発展していったのかを、「祇園御霊会の誕生」、「祇園会の祭礼化」という項目に分けて、同じく九〇分授業二コマで講義しました。受講者数は一〇人弱でしたが、宇部市や山陽小野田市から参加された方もいらつしやいました。

一方、防府市での公開講演会は、九月一日と八日に、防府市文化福祉会館にて行われました。講師は、歴史学コースの池田勇太先生でした。池田先生には、昨年度の公開講演会でも講師をお願いしましたが、今年が明治維新一五〇周年ということもあり、防府市から「明治維新に関する講義ができる方に講師をお願いしたい」との強い要望があり、二年連続で池田先生にご担当いただきました。今年度の演題は「明治維新と儒教」でした。明治維新を支えた思想の一つに国学があったことは、島崎藤村の『夜明け

前」などからも知ることが出来ます。しかし、幕末維新期における武士階級の基礎的な教養には、儒学がありました。そうした儒学思想を切り口として明治維新を見ていくと、どのような姿が浮かび上がってくるのかが、この講義の中心テーマでした。講義に際し、池田先生は「幕末維新と儒教」、「幕末の変革と儒教」、「明治初期の変革と儒教」、「明治国家と儒教」の四つの項目を設け、前半の二つを九月一日に、後半二つを八日に、それぞれ九〇分授業を二コマ使い、わかりやすく解説されました。受講者は二〇名を超え、具体的な史料を踏まえて展開される池田先生の講義に、時折、受講者から鋭い質問が寄せられるなど、終始活気に満ちた講演会となりました。

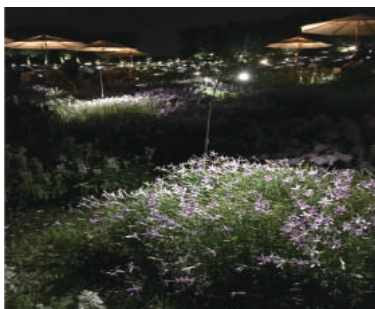
講義中の池田先生



防府市での公開講演会の様子

生涯学習推進室では、来年度も、春もしくは秋にサタデー・カレッジを、秋ごろに防府市での公開講演会を予定しています。日程や講義内容等、詳しいことが決まりましたら、山口大学地域未来創生センターのホームページや、同センターの発行する「受講生募集案内」を通じて、お知らせいたします。気になる講義がありましたら、ぜひご参加ください。

(人文学部生涯学習推進室長  
准教授 谷部真吾)



山口ゆめ花博  
花の谷ゾーン ライトアップ

「明治一五〇年」・「卒業三〇年」  
— 古地図に見る幕末期の山口 —

山本 明史

私が人文学部人文学科(国史学研究室)を卒業したのは、昭和六三年三月のことです。卒業してから、もう三〇年が経ったことになりません。良き師、研究室の先輩、後輩、とりわけ同期の仲間にも恵まれ学生時代を過ごせたことは、今でも大きな財産です。

当時としては珍しく、私は大学のある平川地区ではなく、旧校地の近く、県庁前あたりに下宿していました。そこは老夫婦のお宅の離れで、昔からの下宿屋さんでした。大家のおじさんからは、「ここには一期生のF君も下宿していたんだよ。ある時、ここに友達がたくさん集まって会議をしたこともあった」とか、おばさんからは、食べ物豊富でなかった頃の下宿生の苦労話などを折に触れて聞かせていただきました。同じ下宿で過ごされた先輩の学生生活が偲ばれて感慨深いものがありました。またある時、「これはF君が書いた本だよ」と「古文書への招待」という古文書の入門書を紹介していただきました(まだ研究室を決めていなかった頃のことだと思えます)。私は現在、下宿のあった場所からすぐ近くの文書館に勤務し、古文書に関わる仕事をしていますが、不思議な縁を感じています。

さて、今年(明治一五〇年)あたり、県内各地で様々な行事が行われています。古地図を片手に街を歩く行事もその一つです。健康志向のウォーキング人気に加え、古地図を見ながら歩くことにより、ふだん気付かずにいた事を再認識できる楽しさから、老若男女問わず人気のあるイベントになっています。

文書館では数多くの絵図を所蔵しています。ここでは「山口町村図」という幕末に作られた絵図をご紹介します(図1)。

この絵図には作製年は明記されていませんが、描かれている内容から文久三年に藩庁が萩

から山口に移された時期のものと考えられています。時代が大きく動いた幕末期、山口の町は



図1 「山口町村図」 (山口県文書館蔵)

私の下宿は、県立図書館から県の水の上庁舎に向かうAの通りでありました。現在、庁舎の建っている場所には多賀社が描かれています。多賀社は昭和二四年に高嶺に移されていますが、下宿の前の道は多賀社に向かう道として、今でも電柱に「多賀通」と表示されています。また、庁舎と道を挟んだ向かいには、現在、警察体育館(武徳殿)がありますが、絵図では宝現霊社と記されています。学生時代を過ごした身近な場所だけに、これらの変遷は大変興味深く感じられます。

目を画面中央に向けて、広い敷地の御茶屋の建物が目に入ります。御茶屋は、藩主の参勤や領内巡行の際の宿泊所として、また他藩使節の応接所として使われた藩の公館で、幕末の一期期には政事堂が置かれた。現在、クリエイティブスペース赤レンガや亀山公園の芝生広場になっている付近一帯がこれにあたります。

御茶屋の右隣のBの地点が、現在、県立図書館のある所です。ここは平川地区へ移転する前の文理学部の位置でもあります。また、御茶屋の前の橋を渡った地に山口大学の淵源である山口講堂が描かれています。

このように、この絵図に表現されているのは基本的に幕末期の山口の町の姿です。それに加えてこの絵図は藩庁移鎮後の山口の都市整備計画を策定する段階で作られたもので、当時の人々が「これからの山口の町をどうしようか」と考えた、その頭の中を窺うことのできる点も大変興味深いところです。注意して絵図を

見ると、それらのプランが、ベースとなる絵図の上に、後から別の筆で書きこまれていることに気が付きます。現在に生きる私たちはそのプランの結果を知っているわけですが……。

例えば、Cの地点が現在、山口県庁がある所です。そこには後筆で「瀧村新御殿」との書き込みがあります。しかし、建物はまだ描かれておらず、城地選定の作業が終了し、まさに新山口城の建築予定地がこの地に決まった段階であることを示しています。その結果、ここに藩庁が置かれ、現在の県庁へとつながって行きます。

またDは道場前町の西の端の安部橋で、ここを起点に直に新山口城に向かう新しい道が計画されています。絵図には予定路線図とともに「此新道ヲ開キ屋形ノ南門へ入ル」と書き込まれています。現在も、安部橋から一の坂川に沿い、さらに郵便局や市民館、サビエル記念聖堂登り口の横を通過して県庁へ続く道は「新道」と呼ばれています。学生時代、安部橋のすぐ近くのスーパーダイエー(現在コープになっている所)で学校帰りに買い物をし、この新道を通って帰ることが常でした。当時は、幕末にそのようにして開かれた道とは思ってもみませんでした。その他、この絵図には、新山口城を防禦するための、関門や土塁の構築プランも記されています。

この絵図に書かれている御茶屋の跡地や亀山のみもとには、近代になると学舎が立ち並び、時代とともに幾多の変遷を経て、山口大学のキャンパスへとつながっていったことは皆さんよくご存じのことと思います。自転車通学だった私は、毎日、この旧校地の間を抜け、さらに絵図にも見える石州街道や萩往還を通りながら平川にある大学に通いました。

今は、ほぼ同じ道を当時とは反対方向に自家用車で通っています。日々、少しずつ変化していく風景に目をやりながら、「一五〇年前の山口」、「山大創立期の山口」、「三〇年前の在学時の山口」など様々な時間の重なりを感じつつ通勤している毎日です。

(人文第七回卒 国史学)





一の坂川

御茶屋があった場所から  
山口講堂方面をみた現在の様子



左端の建物が  
クリエイティブスペース赤レンガ



鴻文会会則

(昭和五十六年一月三十一日制定)

(総則)

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市平井七七三二沖田ビル二〇二におく。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 1. 会報及び会員名簿の発行
- 2. 会員相互の連絡、親睦の増進
- 3. その他必要と認められる事項

(会員)

第四条

- 1. 正会員 山口大学文理学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者
- 2. 準会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学部研究科院生
- 3. 特別会員 山口大学文理学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官

(会費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

(役員)

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。

- 1. 会長 一名
- 2. 副会長 二名
- 3. 委員 若干名
- 4. 監事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。

- 1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。
- 2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。

(総会)

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

- 1. 事業の報告
- 2. 会計報告
- 3. 役員を選出
- 4. 会則の改正及びその他の重要事項

(支部)

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則

この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。

この会則は平成九年八月二日より改正施行する。

この会則は平成二五年八月一七日より改正施行する。

- 3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。
- 第八条 委員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部長経験者(本会正会員)ならびに会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。



2018年9月から  
11月開催  
山口ゆめ花博

学生数

(平成三〇年一月現在)

人文学部

	人文学科	人文社会学科	言語文化学科	合計
1年	208			208
2年	208			208
3年	172	1		173
4年		112	110	222
合計	588	113	110	811

大学院人文学部研究科

	人文学専攻
1年	5
2年	5
合計	10

資料提供  
人文学部

同窓賛歌

山頭火から放哉へ

狩野 鉄也

昭和五五年に文理学部文学科哲学倫理学専攻を卒業しました。現在六一歳。一八歳で鳥取県から山口県にやってきました、三二歳でまた鳥取県に帰るまでの一四年間に私が学んだ事は、その後の私の人生にとって、行動の根拠、選択の理由、もちろん心の支えなど様々な役割を果たしてくれました。なかならず山口大学での四年間はあらゆる意味において充実していました。

吉田寮に入り、三日日には、湯田温泉の(今は無き)水野旅館で布団敷きを始めました。仕送りのほとんどなかった私にそのバイトを紹介して下さった理学部物理専攻の先輩は、当初、私が同室させていただくはずでした。しかし、先輩の荷物が多すぎて叶わず、別の部屋(八八号室)に移ったのですが、その夕、わざわざ私の部屋まで来てくださり、水野布団敷きの仲間に入れてくださったわけですから、それから四年間、この水野旅館で同居さんたちとまかないの夕食を食べ、布団を敷き、大浴場を楽しんで、榎野川に架かる秋穂渡瀬橋(あいわたせばし)を自転車ですべて渡って、寮に帰る生活が続きました。いや、正確に言うと、後半の二年は、寮に帰らず、途中、若宮町のドイツ文学専攻の彼女のところに泊まることもありま

た。哲学倫理学専攻では、ユニークな同期や先輩に恵まれ(もともと、哲学を専攻に選ぶなんてユニークに決まっているのですが)、哲学ブームもあって、何が何だかわからぬまま、まんだらでもありませんでした。ただ、卒論となると大変で、アリストテレスもヘーゲルもカントもちょっとかじっただけだったので、長い論文など書けるはずありません。そんな折、コンパで話題になった「因果決定論(運命論)」について、「因果律が絶対だとすると

人間の自由なんてないのではないか?」という私の問いに対して、武宮諦教授は「そんなのはさみしいだろ。」と一言おっしゃいました。「人間の自由意思を救う」ため、初めて自分が哲学しようという気持ちになっていました。最終的に行き着いた「ハイゼンベルクの不確定性原理」についてはここでは書きませんが、吉敷の滝の近くにお住いの武宮教授の「『人間的なあまりに人間的な』一言」に感謝して止みません。その後もずっと支えていただきました。出来はともかく、その卒論で、卒業を決めました。



大学二年の時から、英文科にお邪魔して英語の教員免許単位を取り始めました。英語が好きだったわけではなく、これからは英語とコンピュータだと勝手に思っていたからです。四年生後期まで英語の講義を受け、何とか英語の免許を取ったので、鳥取県と山口県の教員採用試験を受けました。山口県に骨を埋めるつもりですと面接の時に言った記憶があります。鳥取県は落ちましたが、山口県は温かく迎え入れてくださいました。山口水産高校を皮切りに宇部西高校、岩陽高校と一〇年間教師として勤め、家

族とともに鳥取県に帰りました。子供は二人とも山口県生まれです。

二〇一八年三月、鳥取県の県立高校を定年退職しました。英語の教師でしたが、山口大学で哲学することを学んだ経験は貴重で、三八年にわたる教師人生の基礎となりました。

学生時代より何故か気が合っていた同期の社会学専攻の森重(真田)氏にそのかされて、今まで完全に無沙汰していた鴻文に向け寄稿している次第です。

\*この「鴻文」が、冒頭に出てくる若宮町の独文学専攻の彼女のもとへも送られたらと心配して下さる読者がいらつしやると困りますので補足しておきます。彼女への「鴻文」も今のところ私と同じ住所に送られてきます。

(昨年(文理第二八回卒)の年賀状です。)

最後の一年になった。退職後は悲惨な低収入となる。だがその貧乏暮らしがどうなるのか楽しみだ。権力に流され地に落ちた世と決別して、自由奔放に楽天的に暮らせたなら最高だ。およそ変人で通っていた山頭火や放哉のように、衣食住にこだわる事なく坊主となって乞うて廻ることは出来なくとも、出会う境遇がどうあれ、それを甘受出来る感覚を覚えない。種田山頭火は私が以前住んでいた山口出身。酒癖が悪くて頑固であった。私は山口を去ったあとふらっと鳥取に戻った。悪態をつきまくった俳人、尾崎放哉の出身地であるさてどちらへ行くか風がふく(山頭火)流れに浴うて歩いて止まる(放哉)

亀山公園山頂広場が再整備され、山口市内が一望できるようになりました。山頂近くまで車で行くことができます。

ザビエル記念聖堂



道程



藤本 寛奈

山口大学を卒業してもうすぐ丸四年になります。大学で経験したことを今に活かしているという実感はあまりありませんでした。しかし今回の同窓賛歌を執筆しながら、大学時代の経験はちゃんと私の礎となっていることに気づきました。

私は今、山口市の観光に携わる仕事をしています。学会・大会の誘致担当として山口市へ多くの方に来ていただき、山口市にまた行きたいと思っていただけのお手伝いをしていきます。山口大学の先生方をお訪ねすることもあり、学生とは違った立場で再訪できることに縁を感じています。

さて、山大学生生活を振り返ると国際交流活動の日々でした。留学生の生活をサポートするチューターや日本語指導のサポート、サークル活動にと国際交流活動を通して色々な経験をしました。

一番印象深いものは、三大学学生交流プログラムです。このプログラムは当時行われていた(現在も続いていると嬉しいですが)、日中韓三方国の大学生が各国を訪れ文化体験やホームステイを通じ、交流を深めるというものです。受験生のときに大学案内で見たそのページが、当時の私にはとても魅力的で何度も見返し、合格したら参加する!と受験勉強に励みました。

念願叶い二年生では、韓国でのプログラムに参加しました。私の初海外はこの時の韓国で、かれこれ一〇回以上も訪れた今では味わうことのできない、「外国」という衝撃的な感覚を今でも鮮明に覚えています。歴史的な背景から、韓国は近くて遠い国と言われます。しかし実際に行ってみると、親切でやさしい国で

した。もちろん良い意味で。

すっかり韓国にはまった私は、韓国語の勉強に夢中になり、記号のような文字が読めることが嬉しくて、喋ってみたくてますます国際交流活動に励むようになりました。単純なことですが、言葉が通じるということは一言でもとても嬉しいことで、言葉を学ぶ原動力になります。英語学を専攻したきっかけも、自分の英語が伝わりと楽しいと思ったことがきっかけだったと思います。しかしながら韓国語も英語もなかなか上達はせず、そのおかげで今でも勉強を続けているのですが、そんな韓国好きが高じて、今では仕事でも韓国に行っています。経験したことがどこでどう繋がるか分からないものです。

また、どこかを訪れたとき、そこで食べた美味しい食べ物やきれいな景色はもちろん思い出になりますが、その場所に出会った人というのが印象に大きく影響すると思います。韓国はおせっかいな国と表現しましたが、実際に行く前はあっさりした国という印象がありました。しかしそれは勝手なイメージでした。申し訳ないなと遠慮するよりは、自分から相手を頼ってみたり、これ食べたいと言ってみたり(笑)。少し図々しいくらいがあつという間に仲良くなれます。私も韓国に行ったときはその優しさにすっぱりはまっています。

たまたま出会った一人だとしても、そこを訪れた人にとってはその国、その土地の代表の人であり、その場所の印象に繋がります。山口市には、国内外からたくさん観光客が訪れます。一瞬の挨拶や一度の電話対応であったとしても、私の一言が山口市まるごとと結びつきます。そんな大事な役割を担っていることを忘れずに仕事に取り組んでいきたいものです。

振り返ってみると一見、何のつながりもないような大学時代の経験と社会人になった今の私とはしっかりと繋がっているようです。今回の同窓賛歌も、仕事で出会ったご縁で書かせていただきました。自分が重ねてきた経験は、今の私に必要なことだったのだと考える良いきっかけとなりました。

これからもたまにはこうして振り返りながら、新たな経験を積み重ねていきたいと思えます。(人文第三四回卒 英語学・英米文学コース)

ら、新たな経験を積み重ねていきたいと思えます。(人文第三四回卒 英語学・英米文学コース)



山口ゆめ花博 日本一長い竹製コースター

鴻文会 会員名簿利用規則

- 一、会員名簿の更新(新規入会、異動に伴う)と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿(利用者名簿)を作成し、事務局で保管する。



秋高し 吉田キャンパス

吉田キャンパスへの移転前、山口大学文理学部の校舎があった場所は現在、山口県立図書館となっています。



山口県庁

鴻ノ峰



研究室同窓会・同期会だより

### 社会学同窓会東京支部会

原 早苗

山口大学社会学同窓会東京支部会のご報告を  
します。

毎年、一月の最終土曜日の午後恒例の懇親  
会を開催しています。今年は、一月二十七日(土)  
四谷エフ会館(旧主婦会館)で開きました。当  
日は、坪郷英彦名誉教授にお越しいただき、ま  
ず「養蚕と住まい―重要文化財内田家(秩父市)」  
の講演をお聞きし、その後、懇親の場としまし  
た。参加者は、先生方を含めて一八人、小谷典  
子先生にもご参加いただきました。

もともと、社会学を専攻した者は好奇心旺盛  
です。興味深くお話を聞きました。内田家  
は江戸中期に建てられた養蚕に対応した住宅で  
す。

#### ・建築様式上の特徴

・住まいの形に影響を与えた養蚕

・住まいは神と一緒に住まうもの  
と、昔の農家と住まいの混在した姿、農村の豊  
かな文化をうかがい知ることができました。私  
の実家も山口県の山村です。家の中に祀って  
あった神様達を思い起こしました。我が家自身  
がヤケドの神様?で、私が子どもの頃でも、近  
隣のお年寄りが訪ねてきていました。おまじな  
いですね。



後半は、懇親の場です。新しい方々が複数  
えました。なかに五〇年ぶりの再会があり驚き  
ました。英国籍(香港)の若い男性も出席され  
ました。

近況報告では、第二期卒の松尾龍彦氏が天  
皇退位について勉強中との発言や、商社、書道、  
競艇、人材派遣の話など、鶴岡さんや原からは、  
編著の本の紹介をしました。いろいろな話が出  
てきて多士済々です。

昨年は、小谷典子先生をお招きして「日本に  
おけるボランティアリズム」のお話をお聞きしてい  
ます。

講座+懇親会は、昨年に引き続き試みです。  
先生にお会いしたいと初めて参加される方もい  
ます。葉書に欠席の連絡としてあっても、ご自  
身の近況を書き添える方が、ぐんと増えた気が  
します。

関東圏には、把握しているだけで九〇人近い  
方がいらっしやいます。同窓会東京支部会を若  
い方々にバトンタッチしていく試みを、いまし  
ばらく続けます。若いとき在籍していた研究室  
の四年間の結びつきですが、面白いと思ってい  
ます。

関東圏在住の方々のご参加をお待ちしていま  
す。

(文理第二〇回卒 社会学)

### 英語学・英米文学同窓会 開催報告

岡 ゆみこ

去る四月五日、湯田の「防長苑」にて昭和  
四八年卒、第二回目の同窓会を行いました。

五年ぶりの開催で、種々の理由で前回より出  
席人数が減ってしまい、男性一名、女性六名の  
参加でしたが、久々の再会に和気あいあい自然  
と話が弾みました。

今年、我々の思惑を外れ、桜の開花が例年  
より早くて五日には前日の風雨で大半が散って  
しまい、当初の計画「桜を見る会」は、残念な  
がら思いを果たせず、後河原の橋の上で僅かに  
残った花を背に記念写真を撮る結果になりました。  
今回の一番の心残りは、やはりこのこと  
です。その後は、サビエル教会、瑠璃光寺の五重  
塔、新学期が始まったばかりの大学へと、小雨  
がぱらつく中思い出の地を巡りました。天気は  
恵まれませんでしたが、久しぶりの参加者は  
大学が大きいことに驚いたり、サビエル記念聖  
堂が焼失し、再建されたことなど時間の流れを  
実感する一方、後河原の辺りは何年経ても変わ  
らず、今更ながら私達は学生時代を素敵な場所  
で過ごしてきたとの思いを新たにしました。

防長苑では、女性が多いこともあって、思い  
出話や近況報告に話が咲き、時間いっぱいまで  
お喋りが尽きませんでした。皆六〇歳代後半と  
なり、日頃はまだまだ若いつもりでいました  
が、体調面に色々の問題を抱える人もいて、健  
康の事が話題に上る年頃だと再認識させられま  
した。今回ご出席いただけなかった和田先生  
のご健康のことも気懸りの一つです。

二次会のカラオケルームでは、慣れない器械  
操作に、四苦八苦しながらも唯一の男性参加者  
で、長く地元(沖縄)コーラスグループに所属  
している松田君の心地良いバリトンの歌声に一  
同心癒されました。

翌日には、小雨に映える新緑の中、萩まで下

ライブをしました。新しく整備された明倫学舎  
を訪れ、歴史的遺構や興味深い幕末ミュージア  
ムを見学しましたが、高校教師の松田君は「こ  
んな所で働きたいなあ」を連発していました。  
松陰神社にも参りましたが雨に煙る古都は静か  
で美しく、山口県が維新発祥の地であることを  
改めて誇らしく思いました

大学のゼミと一緒に学んだ仲間には他にはな  
い特別な絆を感じます。今回は、今回参加出来  
なかった人達や、卒業年度は違っても同じ学科  
として交流のあった先輩方や後輩の皆さんと一  
緒の開催も良いのではと思いますので、連絡を  
お待ちしております。沖縄に住む松田君の案内  
で沖縄での同窓会も一考との意見もあって、ま  
た何年後かの再会を期して今回の同窓会を終え  
ました。

(文理第二一回卒・英語学・英米文学)



後河原にて

社会学同窓会総会

宮藤 隆夫

平成三〇年度・第四一回社会学同窓会は、六月二日(土)午後四時から「防長苑」で開催されました。

当日は、木下謙治、小谷典子、小川全夫、辻正二の各先生方をはじめ、研究室からは横田尚俊、速水聖子の両先生が出席されました。

また、会員の出席は、昭和二十九年卒から平成一四年卒まで総勢一九名でした。このうち男性会員が九名、女性会員は一〇名で、今年は女性の出席が男性の出席を上回りました。

また、遠く鹿児島市や鯖江市をはじめ県外からも七名の出席がありました。さらに、昭和五五年卒の同期四名(うち三名が県外)は、還暦を機会に集い、そろっての出席となりました。今回は同期の出席が五組ありました。今年と同窓会発足四〇周年の節目の年でもあり、昨年以上の多くの会員の出席を得て、賑やかな同窓会となることを内心期待していましたが、出席者が昨年よりも少なく少々残念でありました。

総会は、森重祐二副会長(昭和五五年卒)の司会進行で始まり、会長(宮藤隆夫)の挨拶の後先生方を代表して毎回ご出席の小谷先生からご挨拶をいただきました。その後会長が平成二九年度収支決算報告を行い、村田博監事(昭和四二年卒)から監査報告を受け、更には質疑応答の後当該案件が全会一致で承認されました。

続いて、横田先生から、岡部先生の転出に伴い、その後任として桑畑洋一郎先生が新たに着任され、社会学講座が七名体制となったこと、卒業生の就職状況が良好なことなど、研究室の近況報告があった後総会は終了しました。その後集合写真を撮り、しばし休憩の後会場を移して恒例の交流会となりました。

交流会は、小川先生のご挨拶とご発声により開宴し、出席者一同テーブルを囲み出された料



理をつつきながら先生方のお話や会員の自己紹介、近況報告に熱心に耳を傾けました。久しぶりに出席した会員や今回初めて出席した会員もあり、一同和やかな雰囲気の中楽しいひと時を過ごした後、木村浩さん(昭和三二年卒)の本締めにより閉宴となりました。  
今年、二九名の卒業生を新会員として同窓会に迎えました。また、同窓会発足以来毎年欠かさず発行している同窓会報は第四〇号を全国各地の会員に九八八通送付しました。会報に同封されている返信用はがきに近況を報告くだされば幸甚です。  
最後に、故山本陽三先生のご尽力により、昭和五三年五月、当時の文理学部文学科の研究室の中で唯一の同窓会として産声を上げた社会学同窓会は、本年発足四〇周年を迎えました。これも偏に歴代の先生方をはじめ会員の皆様方のご支援のお陰であります。今日まで何かと支えていただいた多くの皆様方に衷心より感謝、感謝申し上げます。  
また、今年の同窓会開催に当たっては、学部同窓会である鴻文会から助成を受けました。  
(文理第一五回卒・社会学)

最後の最後の文学科同期会

脇 正典

八月一日(土)に文理学部文学科昭和四四年卒の同期会を行いました。前回、平成二七年に最後の同期会ということで、実施したのですが、閉会間際に、もう一度開きたいという皆の熱望で今年度再度開催しました。

会場は前回と同じ防長苑で、一八名の参加でした。男性十一名、女性七名で、東京都一名、大阪府三名、広島県四名、福岡県二名、島根県一名、山口県七名でした。専攻別では、西洋哲学二名、国史学二名、東洋史学二名、社会学四名、国文学四名、英米文学四名でした。

文学科でこのような同期会ができるのは、大学一年の大学祭で、文学科で劇をしたからと思います。離島の教育問題を扱った「伊吹島」という創作劇であったと思います。脚本・演出・出演者・照明・道具・小道具と多くの皆さんの協力でを行いました。同期会の話が盛り上がり上がります。今回も懐かしい話題になりました。

一般的に高齢者の同窓会といえば、年金と病気の話が相場ですが、集まってきた人達はそれだけ元気なんでしょうか、近況報告では、それぞれ活躍されている様子を窺うことができました。

今回は、国史学が幹事役ということで、野村君が約五〇年前の資料を集めてくれました。当時の世相、亀山、後河原を中心にその周辺の地図と店の一覧表を用意してくれました。

コンパがあった惣野旅館、食事をした一茶、銭湯の亀山湯、おでんの一八等私を利用した店も載っており懐かしく拝見しました。参加の皆さんもそれぞれに思い出の店があったかと思えます。

恒例の近況報告では、一人三分以内と言ったにも拘わらず、年のせいか長くしゃべる人が多かったです。それだけ現在の活発な活動と思われ入れが多かったのだと思います。二一も話題を



メモしてきたと話し始めた方もいましたが、さすがに四つ五つ話されたところで、幹事ストップとなりました。  
最後に集合写真を撮りましたが、出来上がった写真には二名足りませんでした。会の終了間際に退席されたのでしょうか。残念でした。  
今回も鴻文会から助成をいただき、ありがとうございました。  
(文理第一七回卒 国史学)

「マインドフルネス」  
そして世界遺産

満江 寛俊

この度の西日本豪雨により被災された皆様ならびにそのご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧を心よりお見舞い申し上げます。

平成三〇年十一月三日(文化の日)午後二時から、北九州市小倉北区大門の「小倉リーセントホテル」で、私たち一九七一(昭和四六)年入学の「第五回文学科同窓会」を開催しました。二年に一回の開催で、今回は国文科が担当しました。中心となって細かに計画、実行し、まとめあげたのは本園明信さん。多忙な中、居住している久留米から「小倉リーセント」とのやり取りを始め、準備を綿密にしてくださいました。出席者などの担当は、地元小倉で活躍している渡部直知さん。気付かないところまできちんと補佐してくださいました。皆、県立高校勤務を終え、それぞれ人生を謳歌しています。

さて、宴は前回に倣い、開会後三〇分は自由で食事、同じテーブルの方々との歓談をお願いしました。集合写真を撮り、その後、テーブルを移動し歓談を深めてもらいました。短歌、ヨガ、海外旅行をしている人、また、介護をしている人、さまざまですが、充実した人生を送っています。今回は、二次会を①コース「小倉城庭園、松本清張記念館など文学散策」と②コース「会場一階の喫茶店で歓談その後三次会」のコースに分かれていきました。

遠方より、千葉からは社会学の田平智さん、大阪の高校で教鞭をとっている中文の仲尾俊彦さん、国文の一居明子さんは、神戸で読み聞かせを行っているそうです。英文科の、国際経済学者で神戸大学名誉教授の後藤純一さん、(Chir)ロイエル大学大学院)は、慶応大学教授を退職後、後藤経済研究所代表取締役社長として活躍、小説を執筆とのこと。昔話りの

中で、車椅子の白髪の紳士は、半世紀近く前と同じ穏やかな笑みをうかべ、話の輪の中にいました。一九七〇年代、ともに学びともに成長し、感動を共有した仲間たちとの再会で、私たちの会話は過去から現在、そして未来へと昇華していきました。



同窓会というのは、第一義に、会員相互の親睦を深めることですが、今回、特に、皆と話を交わす中で気付いたこと、それは、私たち(高齢者)の生き方や在り方の手がかりや心得が湧いたということです。村上春樹のいう小確幸か、はたまた、手がかりを感じ取るマインドフルネスと呼ばれる幸せの気付きです。それが感じられる時間、それが正にこの同窓会でした。

《住所変更連絡のお願い》

毎回かなりの郵便物が返却されてきます。住所に変更があった場合は、必ずご連絡をお願いします。

鴻文会事務局

Fax : 083-928-4527

E-mail:kobun1981@ybb.ne.jp

今年の七月二〇日(金)NHK総合、午後七時五七分から「世界遺産スペシャル潜伏キリシタン二五〇年の祈り」に、女優タレントの篠原ともえさんとともに、同級生の大石久さんが出演していました。紹介の中で「大石先生は山口大学文学部東洋史学科卒。県立高校教師として教壇に立ったあと、長崎県文化振興課、大浦天主堂キリシタン博物館副館長として、歴史研究の第一線で活躍をされています」とありました。同級生が年をとり、今、いろいろな生き方をすばらしく演出しています。

(文理第二三回卒 国語学・国文学)

平成二九年度  
学部卒業生・大学院修了生の進路状況

	学部卒業	大学院修了
建設業	8人	人
製造業	12	
情報通信業	15	1
運輸業・郵便業	6	
卸売業・小売業	30	
金融業・保険業	22	
不動産業・物品賃貸業	1	
学術研究・専門技術サービス業	3	

	学部卒業	大学院修了
宿泊業・飲食サービス業	2人	人
教育・学生支援業	18	1
医療・福祉	3	
複合サービス事業	0	
サービス業	20	
公務	24	
上記以外の就職先	0	
進学	4	
合計	168	2

# 第五回 山口大学 ホームカミングデー開催

平成三〇年一〇月二十七日(土)、山口大学吉田キャンパスにおいて第六回ホームカミングデーが開催されました。

工学部卒業生でスタンフォード大学客員正教授中村維男先生による「山口大学の過去・現在・未来〜若き後輩へのメッセージ」と題した特別講演や体育館での「バレーボールフェスティバル」、理学部による「サイエンスワールド2018」など、多くのイベントが開催されました。

共通教育棟広場では、岡学長、福本同窓会会長、ヤマミイによる餅まきがあり、大いに盛り上がりました。

人文学部では、OB・OG、退職教員と在職教員及び在学生が自由に交流できるよう、研究室開放が行われました。

平成三一年度は一〇月二十六日(土)開催予定です。是非懐かしいキャンパスに、山口にお越し下さい。

(人文第三回卒・西洋史学 渡邊早苗)



研究室訪問

上 ドボアシユ先生、内田会長、エムデ先生  
下 内田会長、岩部先生

## 留学生による世界の文化紹介



共通教育棟広場で餅まき  
山口県は餅まきが盛んです

研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会に対する助成要綱

(目的)

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会(以下「同窓会等」という。)に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

(助成の対象)

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

(助成の内容)

第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。

2 同一同窓会等に対する助成は、一年度一回限りとする。

3 同一同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

(助成の申請)

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書(別紙様式1)に参加者名簿(別紙様式2)を添えて提出するものとする。

(助成の内容)

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長(以下「会長」という。)はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めるときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

(報告書の提出)

第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書(別紙様式3)を提出するものとする。

(助成の決定等)

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めるときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

(会報原稿の提出)

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」(以下「会報」という。)に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

2 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

(一) 本文の書式は、タテ一行二一字とし、分量は、全五五行以内とする。

(二) 本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業年次、卒業年及び専攻を( )内で文末に表記する。

(三) 会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。

(四) 会報原稿の締切りは、九月末日とする。

(その他)

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

## 附則

この要綱は、平成二四年五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。



山口ゆめ花博 夕暮れのきららドームと花の谷ゾーン

### 鴻文会「賛助会員」の制度に ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」(一人一万円)をもとにして行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行・送付、ホームページ管理などの活動を行い、最近では山口大学同窓会との連携や「同窓会等」の開催に対する助成を開始し、活動も多様化しております。それらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中であって、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございます。

活動を支えて下さった方々のお名前を記し、お礼に代えさせていただきます。  
なお、引き続き、賛助会員制度について、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。  
同封の振替用紙をお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしく願います。

- |                 |      |      |       |
|-----------------|------|------|-------|
| 平成二九年度賛助会員(順不同) | 敬称略) |      |       |
| 多田幸子            | 大塚博久 | 中野安久 | 添田建治郎 |
| 久米慶典            | 村田和夫 | 大谷泰子 | 奥本小百合 |
| 山本孝夫            | 中尾哲雄 | 水本孝二 | 堀田眞由美 |
| 野村明夫            | 内山俊彦 | 宮原省吾 | 細山田康弘 |
| 濱村祐子            | 伊豫英城 | 横田由香 | 高木亜希子 |
| 吉川敏子            | 高橋幸輔 | 藤澤真弓 | 濱寄勢津子 |
| 奥田和子            | 白石重昭 | 岩崎優子 | 近藤千鶴子 |
| 田村浩三            | 小川朝子 | 安田健三 | 小野五百合 |
| 兼村優子            | 平田昌司 | 小西啓子 | 藤田加奈子 |
| 森重祐二            | 川崎里奈 | 清水康裕 | 木村比沙子 |
| 池田厚子            | 大森保典 | 中垣八朗 | 戸谷美代子 |
| 八田順子            | 井上範子 | 岡ゆみこ | 椎野由紀子 |
| 山岡典子            | 原口公康 | 青木隆子 | 田中晋   |
| 井上公嗣            | 石川哲也 | 尾崎徹  | 橋本学   |
| 渡邊早苗            | 繁富恵子 | 菊谷進  | 島越郎   |
| 本馬貞夫            | 藤田和裕 | 小野徹  | 奥間茂   |
| 吴 娜             |      |      |       |

### 編 集 後 記

人間が衰える速度は、各人の生活習慣によって異なるのではないかと。車ばかり乗っている足腰は急速に衰える。パソコンばかり使用して、手書きをしないと文字が書けなくなる。さて、これら文明の利器の使用を否定することはできない。(内田光邦)

毎年のように様々な災害が発生し、心穏やかでない年が続いております。被害に遭われた皆様にはお見舞い申し上げますとともに、平成が終わるもうすぐ来る新時代が、安穏無事の年月であることを願って過ごしているこの頃です。(森重祐二)

講堂の写真を撮りに三年間通った母校へ。旧制山高時代の塀の一部が残っていることにこの度初めて気が付きました。人間は、内なる目で八割、眼からは二割の情報を得ているらしいですが、人間力、まだまだですね。(渡邊早苗)

久しぶりに大学時代のアルバムを開いてみました。古文書合宿、ソフトボール、七夕祭、コンパ、先生や研究室のみんなのなつかしい顔。昨日の事のように思い出されました。(山本明史)

毎年、会報の編集会議が開催されると、年の瀬を感じます。主に諸先輩方が割付の仕方や写真の配置を工夫されている様子を拝見しながら、校正のお手伝いを少々させてもらっています。一年の締め括りに欠かせない行事です。(和崎陸子)

図書館に持ち帰りコーナーがある。時々もらって帰る。ゴシック小説とあったから読んでみたら「?」。よく見たらゴシック小説だった。ゴシック小説は中世のゴシック建築物を舞台にした恐怖・怪奇を主題とした物語。(大谷泰子)

月・火・木曜日の午後一時から五時まで事務の小野さんが勤務しています。付近にお越しの際は、是非鴻文会事務所(沖田ビル二階)にお立ち寄り下さい。会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。(一同)



山口ゆめ花博  
わらアートで巨大キッネ

### 原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によっても会誌の編集を進めます。

ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。投稿要領は次のとおりです。

- (一) 本文の書式はタテ一行二一字とし、分量は全七二行以内とする。
- (二) これとは別に、
  - ①タイトル、
  - ②氏名、
  - ③自身の顔写真一枚を文頭に置き、
  - ④文末に文理または人文卒業年次・専攻を必ず( )内で表記すること。
 ただし①④項合わせて一〇行以内とする。
- (三) 顔写真以外にスナップ写真を掲載したい場合は、一枚限りとして、一枚につき本文の行数を一行ほど削減すること。
- (四) 掲載は全体で半頁(二段)組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- (五) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- (六) 以上、今号の「同窓賛歌」頁を参照のこと。
- (七) 原稿は返却しません。写真は返却します。
- (八) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- (九) 送稿先は当会事務所内、編集部宛。
- (一〇) 締切りは、毎号とも九月末日とします。